特集

患者さんが手術中、また集中治療室での管理中など、
命に関わる状態の時に、そばで見守り、対応してくれるのが麻酔科医です。

麻酔科紹介

■麻酔科医長　株丹　浩二

麻酔科医の仕事

当院の麻酔科医の仕事は、手術中の麻酔管理と侵襲の大きな手術後の集中治療室での全身管理です。

手術は痛みだけでなく、手術操作や出血によって身体に悪影響を及ぼし負担をかけます。麻酔科医は痛みや意識をとることによって患者さんの苦痛をとるだけでなく、適切な輸液や輸血を行い手術操作による身体への負担を軽減します。また手術中は手術操作や全身麻酔のために自分で呼吸をすることが困難になるため、気管挿管といってのどの奥に管を入れて人工呼吸を行い手術時の安全性を保っています。このように意識をなくし痛みを感じなくさせるだけでなく、身体への負担を軽減したり安全性を保つことを総合して麻酔管理といいます。近年では作用時間の短い強力な鎮痛薬を使用することによって手術中の身体への負担を軽減するとともに、手術後の安全性の向上を図っています。また、背中から神経の近くに管を入れて痛み止めの薬を持続的に入れたり、あるいは点滴から持続的に痛み止めの薬を入れたりして、手術後の痛みを軽減する努力を行っています。このため麻酔科医は手術の開始前から手術が終わって目がさめたあとまで、患者さんのそばにいて状態をみまもり必要な処置をしています。

一方麻酔管理に必要な気管挿管や人工呼吸、循環の管理といった技術を活かして、呼吸や循環に障害をきたした重症患者さんの治療を集中治療室において行っています。

手術室での麻酔

当院手術室では年間6,000件を超える手術が行われており、そのうち麻酔科が麻酔管理を行うものが約2,850件あります。このうち全身麻酔症例が2,650件、脊椎・硬膜外麻酔が200件行われています。年齢別では、6歳未満190例、65歳まで1,310例、66歳以上1,350例と幅広い年齢層に対応しています。近年は内視鏡を併用した手術の増加によって患者さんへの手術の負担は軽くなる一方で、内視鏡手術を行うための気腹操作や肺分離換気など麻酔管理は複雑化しています。これに対して、人工心肺55例、分離換気124例、伏臥位550例など複雑な麻酔管理にも対応しています。

麻酔器の確認をしている株丹医長

手術室風景

集中治療室（ICU）での呼吸循環管理

ICUは、体への負担が大きな手術を受けた後の患者さんの全身管理を行う病棟ですが、そのほかに手術後以外でも呼吸の状態が悪くなった患者さん、血圧がひどく低下した（ショック状態）患者さん、などの治療を行っており、当院では24時間体制で日当直医が常駐し患者さんの治療にあたっています。患者さんの呼吸の状態に合わせた人工呼吸療法、ショック状態や尿の出なくなった患者さんの血液から毒素を除去する血液浄化療法なども行っています。

ICUには、年間約300名の患者さんが入室され、多くは心臓の手術後や食道癌根治術といった身体への負担の大きい手術の術後の方で数日の全身管理ののち一般病棟へ移ります。昨年は約210人の方が入室されました。また敗血症性ショックという全身性の重篤な感染症の患者さんや重症肺炎などの呼吸不全の患者さんなど手術後以外の方も入室されます。昨年は約90人の方が入室されました。全身管理は1週間以上と長くなることも多いですが、回復して一般病棟へ移られ、退院時にICUを訪問される方もおられます。

病棟での活動

患者さんの状態に合った最適な麻酔を行うために、術前検診を行っています。手術を受けられる患者さんには手術自体と同様に麻酔についても不安が多くありますので、このときに麻酔についても説明をして、できるだけ不安等を軽減できるようにしています。またこの時に手術の内容や術前の状態によって手術後病棟へ帰室していただくか集中治療室で経過をみさせていただくかを決定しています。

また病棟での人工呼吸療法を支援する呼吸サポートチームでの活動や急変時の治療の支援なども行っています。

麻酔科スタッフ紹介

麻酔科は現在スタッフ7名で、病院の中央部門である手術室での麻酔と集中治療室での治療を行っています。麻酔および集中治療の専門医も多く、当院は日本麻酔科学会認定病院に認定されています。

スタッフ紹介

谷口（たにぐち） 正廣（まさひろ）	診療部長・麻酔科医長、麻酔科専門医
株丹（かぶたん） 浩二（こうじ）	診療部長・麻酔科医長、麻酔科専門医・集中治療専門医
小野（おの） 剛（つよし）	麻酔科医長、麻酔科指導医
前田（まえだ） 麻里（まり）	麻酔科認定医
野上（のがみ） 悟史（さとし）	麻酔科指導医
檀浦（だんうら） 徹也（てつや）	麻酔科指導医
谷岡（たにおか） 野人（のひと）	麻酔科指導医

麻酔科医は直接患者さんとお会いする機会は少ないですが、手術を安全に受けていただくため、あるいは重症な状態となられたときの治療を支援するために働いています。目に見えないところで働いていますが、決して怪しいものではありませんのでご安心ください。